対話：縄文住居復元と史跡公園

吉田　泰幸（以下､「吉田」）　第三部の「対話」を始める前に、少し補足をします。復元住居の例として、これは石川県の遺跡公園に建っているものです。確かに茅葺き屋根の復元住居は多いです。ジョンさんの話の中に出てきた三内丸山遺跡は、**六本柱の復元建物**が有名ですが、これも発掘時は柱穴と柱根が残っていただけです。この復元に至るまでにも様々な議論があったようです。

石川県内某所の復元建物

ジョン・アートル（以下、「アートル」）この建物のことは青森県教育委員会の**岡田康博**さんに話を聞きました。柱の根元が残っていたので太さは分かる。重さも土圧で分かり、重さと大きさが一致する復元ということでした。

三内丸山遺跡公園

吉田　この復元建物は ICOMOS の視察委員には不評だったそうです。お二人の発表では様々なキーワードが出て論点も多様になりそうですが、まず高田さんの発表に対して、ジョンさんの観点から、もう少しここが知りたかった、ということはありますか。

アートル　これは前にも話し合ったことがありますが、縄文時代だけでなく、住居の復元をし始めたきっかけと、なぜ最初に茅葺きにしたのか、という復元の歴史の話について改めて教えてほしいと思います。

＊下部にある註は吉田泰幸執筆

六本柱の復元建物　現在の三内丸山遺跡公園のランドマークになっている。この復元については様々な議論があった。その渦中にあった歴史復元イメージ画家・安芸早穂子氏の体験が本セミナーシリーズ第 2 回にて語られている。次章参照。

岡田康博　三内丸山遺跡の事前発掘調査の主たる担当者。「縄文ブーム」によって生まれた数々の本の共著者になっている。

高田　和徳（以下、「高田」）　静岡県に**登呂遺跡**という弥生時代の遺跡があります。戦後すぐに調査して、茅葺き竪穴として復元されました。それ以前にも建物復元の例はありましたが、本格化したのは戦後で、長野県が中心となりました。塩尻市に**平出遺跡**があります。縄文だけでなく、古代・平安時代まで、各時代の竪穴住居の調査をして、その各時代の竪穴を復元することになりました。発掘調査はもちろん考古学者が行いましたが、復元は建築の先生が関わっていて、**報告書のなかで建築担当の先生が次のように書いています**。建物の復元の根拠となる発掘の情報は主に柱や土坑の深さや大きさ、大体そういうものしかわからない、上屋に関しては全く情報がない。家の大きさやある程度の構造は、どこにどういう柱があるのかということなどから根拠があるが、建物の上の屋根に関しては全く情報がない。情報がないので江戸時代の島根県、この地域は鉄の生産が盛んな場所ですが、そこにタタラという鉄を生産するための施設があり、その屋根の上屋部分の復元を参考にしている、建物全体を復元したけれど、実際には根拠はなくまだわからない、というように書かれています。そのようにして復元された建物がイメージとして定着してきた。つまりそこがスタートだったのではないかと思っています。参考にしたのはタタラの建物の茅葺きだということをきちんと断っていたが、その次からはほとんど注釈がなくなり、今では当たり前のように茅葺き屋根として復元しています。

アートル　わからない、というところから出発したものの、次のところは、先行事例はこういう風にやっていたから、ということしか言えないということですか。

高田　そういうコピーが繰り返されてイメージとして定着してしまった。古い民家、例えば近世民家は茅葺きのイメージがあって、古いものであれば、茅葺き屋根だろう、という事がどんどん遡って、それが縄文まで行ってしまった、ということです。

吉田　今の話はジョンさんが言及した「アクターとしてのモノ」だと思っています。つまり復元された住居に影響を受けて、次も似たようなものを作ってしまうという、

登呂遺跡　戦後間もない頃に発掘調査が行われた弥生時代の遺跡。静岡県静岡市所在。水田跡も見つかり、稲作文化としての弥生時代像を確立した象徴的遺跡でもある。本遺跡の調査をきっかけに日本考古学協会が設立された。当時の様子を知る調査メンバーの一人である大塚初重氏は、講演会や書籍で当時の体験談を繰り返し語っている。その中で大塚氏は、登呂は戦後の日本考古学の希望であり、戦後日本の希望だった、と述べている。URL: http://www.asahi.com/culture/news_culture/TKY200811160071.html（2017 年 2 月 5 日にアクセス）

平出遺跡　塩尻市に所在する縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡。国史跡。遺跡公園となっており、各時代の復元住居・建物が復元されている。塩尻市の歴史系博物館は「平出博物館」という。

報告書のなかで建築担当の先生が次のように書いています『平出』（平出遺跡調査会 1955）の第 6 篇は、当時東京大学教授で工学博士の藤島亥治郎執筆による「建築址の復原的考察」である。

それは「アクターとしてのモノ」の好例ではないか、ということです。

アートル　モノというものをアクターにするというのは、一回モノができあがってしまうと、なかなか変えにくいということも影響します。英語圏では、**Obduracy という言葉を使った研究**があります。Obduracy は日本語に訳しにくいですが、変化に抵抗する、というような概念です。これがよく使われるのは都市計画の分野です。道路や建物を作り、それが一回形になった後は、間違っていると後から思っても、なかなか変えられない。原因は法規制やその他様々ですが、そういう風に変化しづらくなるという現象は、住居の復元でも見えてくるのではないかと思っています。

吉田　茅葺き屋根の復元住居が普及したプロセスというのはまさしくそうだ、と。

アートル　そうです。例えば復元住居がすでにあった時に、御所野遺跡の事例のように、土屋根の可能性も考慮に入れて、復元住居をどうするのか考え直すというのは、予算がある時しかできないという現実的な問題もあるでしょうし。

吉田　高田さんの話の中で、長野県の話が出てきました。今日は長野県茅野市の尖石縄文考古館で学芸員をされている功刀司（くぬぎ・つかさ）さんが来ています。しかも史跡整備担当です。尖石遺跡にどのような復元住居が建っているのかということと、その復元の根拠、高田さんが言及された平出遺跡の復元プロセスについて、長野県の方で聞いている事があれば、それも教えていただきたいと思います。

功刀　司（当時・尖石縄文考古館。以下、「功刀」）　**尖石遺跡**が国の特別史跡に指定されていて、公園整備は基本的には終わっています。公園に行くと先ほどから話題に出ている茅葺きの復元住居が六棟建っています。それが同じ時期の村の様子ですよ、ということです。平出の復元の根拠となったのは、藤島亥治郎さんという設計者がいて、先ほど高田さんが言われたとおりのことを書いています。尖石の場合でも復元住居の設計をした先生がいます。**堀口捨己**という東京大学の建築の教授で、本来の専門は茶室だと聞いています。その方がたまたま尖石遺跡の脇にあるもうひとつの遺跡の発掘を見た時に、「では上屋はどうなんでしょう」という話になり、では私が設計図

Obduracy という言葉を使った研究　都市計画分野での代表的な研究例として Hommels 2005 がある。

尖石遺跡　縄文中期を中心とした遺跡。「脇にあるもう一つの遺跡」とは谷を挟んで北側にある与助尾根遺跡で、両遺跡を合わせて特別史跡「尖石石器時代遺跡」に指定されている。功刀氏が「尖石」と言う場合は両者を含んだ範囲を指している。「茅葺きの復元住居六棟」とは与助尾根遺跡をもとにした復元で、保存管理計画書（茅野市教育委員会 2016）によれば、尖石遺跡にも復元住居が建てられる予定である。堀口氏の設計を基本とするが、最新の成果も取り入れるとある（同 : 106）。

を書くと言って、ほんとに設計図が来たのです。その時も復元の理由が書いてあります。理由は同じで、上屋はまったく分からないが、参考にしたのが、奈良県の古民家の茅葺き部分と、古墳時代の鏡に住居の絵が描かれているものがあって、それの屋根の部分をそのまま持ってきた、ということです。そのため神社建築と同じような交差した千木をもった屋根の形になっています。そういう経過を経て昭和 24（1949）年に復元されました。

それを平成 12（2000）年、御所野遺跡公園がオープンした頃に、尖石でも改めて復元住居をどうしようか、という話になりました。先ほど議論されていた中で一番悪い方向に行った例だと思います。住居について研究する暇がない、復元の根拠がない、だから昔の茅葺きの設計のまま、これは研究上の記念碑として建てるという理屈で建てました。そして我々は今、「これは縄文時代の家です」と子ども達に言わないといけない。私も御所野公園ができてすぐに見に行きました。見に行ってショックを受けて、長野まで泣きながら戻ってまいりました。今でも尖石では子ども達に「これは縄文時代の住居なんだよ」と言う一方で、頭の中では「それは嘘だよね」と思う、相反するものを抱えています。今は尖石遺跡を史跡公園として今後どのように再整備・管理していくかを計画している最中で、文化庁の主任調査官という偉い人から、「尖石の住居はどうしますか、住居の勉強をよくしておいてくださいね」と言われています。必死に勉強しています。だから今日は信州から飛んできて、情報収集にあたっているということです。

復元に影響を与えたことがもうひとつあります。地元の著名な考古学者に**宮坂英弐**という方がいますが、その人が茅葺きの案を受け入れた背景には、長野には穴蔵（あなぐら）というものが今でもあります。冬の作業場で、まさに竪穴のように掘ってあって、上に茅で屋根をかけて、障子を建てた構造のものがあります。だから当時も茅葺き屋根が非常に受け入れやすかったところがあって、設計案がストーンと入ってしまった。加えて、登呂も平出も似たようなことをやっているということもあって、広がったということです。そこへ御所野の例が出てきて、大騒ぎということです。

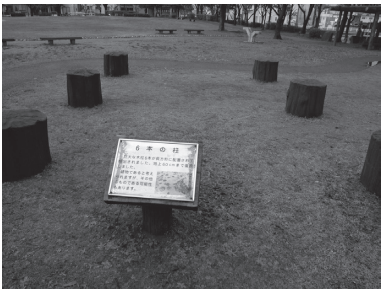
アートル　私は考古学者ではないから復元の当否の判断はできないのですが、古民家

堀口捨己（ほりぐち・すてみ）　茶室の数寄屋造りや日本庭園の研究から、それらとモダニズム建築の理念の融合を図った建築家として知られる。功刀氏の「本来の専門は茶室」、というのは前者の研究者としての堀口捨己理解によるものと考えられる。また、歌人としても知られている。堀口の処女作、紫烟荘は茅葺屋根をもつ洋館である（栗田監修 1971）。

宮坂英弐（みやさか・ふさかず）　小学校教員の傍ら、尖石遺跡の調査を行っていた。尖石遺跡が国史跡に指定された後は、与助尾根遺跡の発掘調査も行い両遺跡調査の成果として報告書『尖石』（宮坂 1957）を刊行し、先史集落研究に大きな影響を与えた。復元した土器を自宅の縁側に並べて訪問者に見せていたことが後の「尖石館」、「尖石考古館」の前身となるなど、宮坂氏と尖石、与助尾根遺跡の関係は『原始集落を掘る·尖石遺跡』（勅使河原 2004）に詳しい。

を参照しているという点だけを見て、ナショナリズムの発露と解釈する人たちには、そうではないと、これまでの話を聞いて改めて言いたい訳です。面白いと思ったのは、報告書の中でも、これは分からなかった、これはこういう考えでつくってしまった、と書いてあっても、実際に作ってしまうと「こうであったかな」ということが「こうである」に変わってしまう。どうやって復元の中で迷いを取り入れるのかが、今後の課題かと思いますね。

金沢市チカモリ遺跡の木柱列復元 1



金沢市チカモリ遺跡の木柱列復元 2

功刀　そうですね。我々にはどういうやり方があったのか。やり方も色々あります。全部復元するのか、金沢市内のチカモリ遺跡の環状木柱列のように、巨大な直径のままで短くしてしまう。短くするが太さはそのまま示すというやり方もある。それだけでは、今度は伝えられないものが出てくる。縄文文化の建築技術などについて伝えられない。じゃあどうしよう、となったときに突き詰めが甘いと、「どこかに例があるからそれを引っ張って来てやりましょう」ということに落ちついていく。私は最近、「これは実際の発掘調査の成果とは違いますよ」と言いながら説明します。ここまでは確かだけど、この復元のここはまだ分からないというところは、はっきり言った方がいいと思います。

吉田　先ほどの話だと、再整備はもう目前という事ですね。

功刀　そうです。もう前回建て替えてから 10 年になります。尖石では御所野遺跡のように修理しておらず、屋根は腐る、根は腐るという状態です。しかも、生ぐさい話で恐縮ですが、復元住居の解体をして、もう一回建てたら 900 万円かかる。900 万円を 6 棟とすると、それはできないので、ではどうする、というところです。しかも、御所野の土葺きの住居のように調査事例からきちっと復元された物がもうできている。じゃあ尖石はどうなんだと、信州は岩手の一戸町と同じなのか、ちゃんと研究して最新事例で建てるのか考えろ、と今言われていて考えている。そういうところです。

アートル　だから、ある意味で御所野が影響を与えているアクターでもある。

功刀　御所野遺跡博物館の中にパネルがあります。橋を渡って館に入ると、全国の復元住居というパネルがあって、そこに確か尖石もありました。その中で、信州という土地柄で、住居の構造に違いはないのか。要は地域ごとに違った風味があってもいいじゃないかという、それを学術的にきちんと担保して復元できるか、やれるものならやってみろ、と上の方からは言われていて、今必死ということですね。

吉田　地域ごとの風味という話になると、ジョンさんが強調した「多様性」もテーマとして考えていきたいですが、今日はもう一人、遠くから来ていただいた方がいます。埼玉県の蓮田市の田中和之さんです。蓮田市では黒浜貝塚という遺跡の整備を計画中ということです。方針として、もはや復元住居を建てない方向で考えているということです。田中さんに、その計画を話せる範囲で教えていただきたいと思います。

田中　和之（埼玉県蓮田市教育委員会。以下、「田中」））　蓮田市でも復元住居を作ってありまして、茅葺きです。蓮田市の黒浜貝塚は、カキの着床する半養殖のようなことをやっていたと考えています。その施設の一つに棒状痕が付いていて、それは葦原に生えている葦を使ったのではないか、という考えです。それとは全く違う地域性の一つとして、蓮田市は「石なし文化圏」です。その中で地元にある石状のもので硬砂というものがあり、凝灰岩砂岩と言われているものです。それが牡蠣に着生した状態で出てきたというのがあって、私どもの場合では、縄文中期から後期には葦を使った住居があったのではないかと考えています。黒浜貝塚について話をする前に、2 点質問があります。先ほど焼失住居がたくさんあり、意図的に燃やした可能性があるということでしたが、そのように考える理由について詳しく聞きたいです。それと、御所野の掘立の復元建物の屋根材はクリの皮を使っているのでしょうか。

高田　火災実験をしたのですが、最初は予想以上に燃えませんでした。それには理由があって、当初復元したときは、掘り込みの部分の土の量というものをきちんと計算していなかったのです。竪穴の掘り込みの中に土がかなり押し込められているから、屋根の全体に土が乗っていたという想定で復元しました。ただそれだと、例えば中で火を炊いても煙が充満するので、どこかに煙抜き用の窓をつくる必要がある。入り口以外はすべて土で覆われていただろうから、入口の上に窓をつくりました。そうして燃やしてみました。最初火をつけると勢い良く燃えますが、しばらくするとすぐ消えてしまいます。原因は酸欠です。当たり前の事ですが、竪穴は土で覆われているので中は密閉されてしまいます。その中で火を燃やすものだからどんどん酸素が足りなくなってしまい、消えてしまう。何回やってもダメでした。これでは実験にならない、ということで、上の窓をかなり広げてみました。そしたら中に空気が入りやすくなったので少しは燃えるようになりました。それでも実際はなかなか燃えにくいのが実情です。それを何回かくり返しているうちに少しずつ燃えるようになり、屋根の高い部

分に穴があき、さらにその周りも燃えて落ちるようになると火力は一気に強くなり、勢いよく燃えました。竪穴の調査では炭化材とともに西側の壁が真っ赤に焼けていましたが、この部分の焼土は壁際周辺の屋根が焼け落ちてから勢いよく燃えた時に形成された焼土だろうということまで推定できるようになりました。

このような状況を整理すると、例えば過失で火をつけてしまっても火事になって燃えることがないということがわかります。竪穴で火を炊いてそのまま放置していたら知らないうちに燃えてしまった、ということも考えられない。家を燃やすためには、その場所でどんどん空気を入れたりしないと燃えないことがよくわかりました。これは縄文人の事を考える上では非常に参考になりました。つまり何らかの理由で縄文人が意図的に家を燃やしたということがわかったのです。それについてはいろんな説があります。考古学者の岡村道雄さんは廃屋を片付けるために燃やしたのではないか、とおっしゃっていました。私や北海道の研究者の人たちは、アイヌと関連づけて考えています。アイヌの場合、その家に住んでいる特定の人が亡くなったらその家を燃やしてしまうという風習がありました。なぜ燃やすかというと、亡くなった人にその家を持たせてあげる、一緒に送るという儀式を行ったのではないか、と言われています。カシオマンテといいますが、そのような風習と考えてみれば、縄文の遺跡で焼失住居が多いということも理解できると考えています。土屋根の場合実験で確認したように、すごく燃えにくいということから考えても、家を燃やすことに特別な意味があったのではないかと考えています。つまり精神的な行為として家を焼いているのではないかと考えるようになりました。

二つ目の質問についてですが、掘立の復元建物の屋根材は木の皮を使っています。クリの木の皮、樹皮を使っています。根拠としては、さきほど言ったように竪穴から茅が全く出てこないということです。縄文時代の遺跡でもほかの遺跡から少量出土している遺跡はありますが、出土する例は非常に少ないです。

アートル　私の調査で、富山県の桜町遺跡でも茅が見つかったというのを読みましたが。

高田　桜町は低湿地遺跡ですね。ですから焼けたものじゃないですよね。桜町では樹皮が出土しており、最初は縄文時代のものと発表していたら後で古墳時代のものだということがわかりました。茅は、縄文ものですか？

アートル　・・と読みましたが、私は。勘違いかもしれませんが。

高田　茅は出てないのではないかな、縄文のものは。実は一戸町でも弥生時代の焼失竪穴を調査していて、そこでは茅が残っていましたが、全国の遺跡の焼失住居を調べてみてもほとんど茅は出土しない。そういう状況から考えると茅で屋根を葺くという

のは縄文では難しいのではないかと考えています。

アートル　浅川滋男さんの解釈によると、土葺きの住居が燃えたあとは保存状況がいいはずだから、そこで出てこないというのは土葺きの住居では茅を使っていないということが言えるが、焼けた建物でほとんど何も残っていないというところがたくさんある。するとそれらでは木の皮でも茅でも、両方とも使っていたのではないかと。竪穴から何も出てこないというのは、土葺きでない場合は別の物を使っていたと考えられるのではないかと。

高田　燃えてなくなるから、ということですね。

アートル　燃えてなくなるから、土ではないと言えるのではないか。私が疑問なのは、穴を掘らないと竪穴は作れないので、掘った後の土はどうにかしないといけないということです。別のところに運んでいくのはある意味で大変な事で、そのままそこにあったのか、それを乗せるのか、という疑問がありました。そう考えると、土葺きにすると掘った土をそのまま乗せる、茅にするとどこか外に行って茅を取って持って帰らなくてはいけない、どちらが簡単かということを考えると、土で屋根を、というのは論理的ではある。まったく茅などを使ってなかったのか、は別途考えないといけない。

高田　茅葺きの可能性が低いというのは、古墳時代の群馬県中筋遺跡の例からも言えると思う。中筋遺跡では茅を下地として、その上に土を乗せてさらにその上に茅を乗せている。茅を下地として使っているという例ですが、御所野遺跡の近くにある小井田Ｖ遺跡で土の下に茅が縦・横交互に重なって出てきた例があります。おそらく土屋根の下地として茅が使われたと思われます。そのように考えると、弥生時代以降に茅も利用されるが、古墳時代から古代、平安時代ころまでは外観が茅葺きという状態ではなく、土で覆われていて、茅そのものが表面に出る、所謂茅葺きという技術は、むしろかなり新しいのではないかと私は考えています。もちろん古代ではすでに鉄の鎌があるので茅は大量に採取できると思いますが・・・。さきほどから何度か「土葺き」と言われますが、正確には「土屋根」です。茅のように葺くというのではないと思います。縄文のときは茅の出土が少ない事と、弥生時代以降は茅を下地として使い、さらにその次の段階として、土がなくなって茅だけになるという経緯で茅葺き屋根がはじまる、というように私は段階的に考えています。もちろん具体的にはまだまだこれから研究していかなければならないですが・・・。

田中　蓮田市の方でも縄文中期以降だと土屋根はあります。それはまちがいないことです。最近分かってきました。その可能性を考えるようになったということで、やはり御所野の例は大きいことでした。ただ、縄文前期以前というと、蓮田のほうではま

だそれを証明することができない。たまたまうちの方で作った市民団体で、私も参加してやらせていただいたのですが、言われているように、多分弥生以降の稲作が成立すると、今の民家の屋根の下地には、一番下地に藁をひいていますから、おそらく藁でやっているのではないか。ただ、試した感じでいくと、鉄を入れないで、「ガンギ棒」という民具を使いますが、それを使って葺くと、意外と丈夫になります。

また、蓮田市の方では、復元住居を作るのを一切やめようという話になっています。予算のお話が出ていましたが、一棟 900 万というのは、私どもの方でも調べたりしました。蓮田市の近所で富士見市に水子貝塚がありますが、その公園でも復元住居を建てて 15 年過ぎたから、やっと補助金がもらえて修復できる状態になったけれど、予算にも制限があるので全ては直せないということでした。そういう状況であれば、蓮田市の方は AR（オーギュメンテッド・リアリティ）を使おうか、という話で今進めています。AR を使いながら、建物の分の予算は、なるべくそちらにまわしてしまうという構想です。せっかくだから AR の中で縄文の四季を作ろうと。ただしそれをしようとすると、分からないこともあります。周辺の植生などです。蓮田市周辺に関しては、花粉分析をやっていただいて、樹木の環境はコナラ属が 90％ということです。最近は花粉分析の考え方も変わってきているようで、クリ花粉は空中浮遊しない、昆虫が運ぶ虫媒と言われていますから、花粉分析の結果をそのまま受けとるのは少し問題だろう、もしかしたらもう少しクリが多くてもいいのでは、と考えています。それでもコナラ属の量がそれなりに多いだろうとは思っています。

蓮田市の場合には、住居でいくつか実験していて、柱の根元は全部焼き入れします。その代わり樹皮はつけてあります。それでも 10 年、20 年経っていても、腐っていないです。まだまだ丈夫という状態です。ただし、焼いてあげないと、腐ってくる。地面と接している部分に関しては、焼いてあげないと駄目というのが分かりました。入り口の所で一本、焼き入れをわざとしないで腐るかどうか試してみたら、10 年で腐ったということがあります。後は、やはり地域的な部分もあると思います。縄文前期の土器型式の違いからみても、東北と関東では違う建物になってくるとも思いますので、そういう考えで、工夫しながらうちはうちでやってみようかというところです。

高田　実は御所野でも最初は業者に発注して設計図を作ってもらいましたが、何となくしっくりこなくて次からはやめました。例えば設計で柱の太さの径がいくらということで数値を出しますが、業者は指示した直径より大きければいいということで、どうしてもそれより太めのものを用意してしまう。したがって普通の建築工事のようにはできない。本来であれば材料を調達するときから立ち会わなければならない。したがって復元建物というのは、図面だけでは表せないので直接立ち会って材料を選定したりしなければならない。また建築の時にも現場合わせの部分が非常に多くなるので非常に難しい。修理も 4 年目になっていますが、全部直営でやっています。大工さんを直接雇用して一緒に修理しています。もちろん最初に建てた物をもとにして修理し

ていますが、データはきちんととっています。考古学の実践データとしても使えるように。例えば土の中に入っている部分はかなり傷みやすいということが明らかになったので、その部分を焼きこんだりしながら新しい情報も仕入れてから大工さんと打ち合わせをしながら修理しています。もちろん材料の仕入れも山で木を切るところからはじめてさらに現場合わせで作り上げていく。そのようにしないといいものができない。逆にそうすることが実は新しい情報になるのです。そういう作業を繰り返すと縄文時代の建物を作るのも非常に難しいという事がよくわかる。建物復元というのはわからないことだらけですが、それを繰り返すことで徐々に本物に近づけていきながら、それを記録として残すことが大事だと思います。現在、御所野遺跡の整備報告書は 2 冊出していますが、その報告書に新たな情報も加えて再来年度総括報告書を刊行する予定です。

今までの整備事業では工事で作ったら一段落で、その後手入れもしないし、中で火を燃したりもしないから、すぐ腐ってしまう。そこに見学に行くと、もう二度と入りたくなくなるような悲惨な建物になっている例があちこちで見られます。そうならないためにも日常の管理にも人が関わって、極端なことを言うとそこに住むくらいの意気込みがないとなかなか成功しないと思います。そのような体制が作れるかどうかが、建物復元において非常に大事ではないかと思います。

功刀　考古学やっている人間だから屋根が土かどうかを議論していますが、今回は文化資源学セミナーという事なので、なぜ復元家屋にこだわるのかを話させてください。きちんとした学術的な調査で縄文時代の技術レベルはどのくらいなのかを子どもたちだけでなく大人にも知ってもらうことが、ひとつの町づくりにも繋がるというところで、みんな必死です。だから、「どこかでやったのがあるんだから、それと同じものでいいじゃない」でやってしまったら、私みたいに苦しむことになります。公園に来た人に、「こんなものは昔は建っていなかったんですよ」と言ってしまったら、二度と見に来ないかもしれない。そういうものは見ようとしないと思うので。やはり学術的な基礎があって、それがあっての復元だと思います。それを、蓮田市は映像でやるのですか？

田中　そうですね。平面、いずれは３Ｄにしようかと。

功刀　そういうものであれば、作ってからでも変えられていいなと思いますが、そういうことにこだわって侃々諤々やっていることを、いろんな人に理解して聞いていただけた方がいいかと思います。

アートル　私がいいなと思うのは、縄文公園の整備をするのは、子供たちに過去の良さを知ってもらうとともに、現代の考古学や、今の科学調査のすばらしいところも知っ

てもらえるところではないかと思っています。公園の整備というのは、考古学や科学に関心を持ってもらえるものではないか。結局、縄文住居の復元というのは、縄文時代の人がつくったものではないから、それは我々がつくりましたよ、ということを正直にみせることが、この学問はこんなにすばらしいものだよ、ということでもある。

功刀　そう考えるのもありですね。

吉田　考古学者以外の方からも質問ありますか？学生からでも。

Maharani Dian Permanasari（文化資源マネージャー養成プログラム学生。英語での質問で要旨は以下のとおり）

① パブリック・アーケオロジーの活動として、子供たちをどのような復元プロセスに巻き込んでいるか。
② なぜ世界遺産に推しているのか。

アートル　三内丸山では、二年ほど前から縄文ムラづくりという、小学生を対象に 4 週間にわたり縄文時代の住居つくるイベントがありますが、御所野でも似たようなものがあるのですか。

高田　火をつけて燃やす火災実験に愛護少年団という子供たちが全員来ました。さすがに住居を作ることはできませんが。

アートル　二つ目の質問は、なぜ御所野遺跡を世界遺産にしたいのかということです。なにか目的、メリットがあるのですか。

高田　それは非常に難しい事です。縄文の文化という中で、なぜ世界遺産を目指すのが北海道から北東北にかけてなのかは今も議論しているところですが、まず、少なくとも日本にある縄文文化を世界に知ってもらいたい、ということが一番大きい。そのために 2007 年ぐらいに国で候補を公募制にしてから、その次の年に北海道と北東北でいこうということで北海道・青森・秋田・岩手の 4 道県で手をあげました。

アートル　その世界遺産にもっていこうとしたときに、最初はボランティア団体が動き出した、ということでしたよね。

高田　そうなんです、それが実は大事なことです。行政的に世界遺産にもっていこうという前に、御所野遺跡のほか北海道の南茅部遺跡、青森の三内丸山遺跡、それから秋田県の大湯環状列石という 4 遺跡で活動しているボランティアグループがあって交

流していましたが、ボランティア団体がそれぞれの知事に縄文を地域づくりに生かそうということで提言しました。

アートル　その後、知事の命令で、（高田さんは）こういう活動に入りこんだということですか。

高田　最初にそれぞれの知事に事業を提案したのはボランティアグループです。岩手県のグループは岩手県の知事に対して要望している。４道県でやりましょうとなり、事業を「北の縄文文化回廊事業」と名付けて、縄文文化を生かした地域づくりをしようということで採択されました。イベントは北海道からスタートして、青森、秋田、最後は岩手というように４年間やりました。事業はボランティア団体だけでなく、行政、あるいは博物館や大学なども含めて、広範囲な構成とし、いろいろなイベントを実施しました。事業の最後に報告書を作成し、そのなかで将来は世界遺産を目指そうということにしていた。その先は行政的に動くので、最初はボランティアの人たちがやったということが、なかなか見えなくなってしまいましたが、きっかけはそういうことだったのです。それは逆にいえば、遺跡というのは、いかに地域の人を遺跡にどう巻き込むかというのが非常に大切ということです。それがこういった大きなことまで繋がってきたということです。

吉田　もともと田中さんに話をふった理由の一つは、竪穴の復元住居を作るのに一棟1000万円弱の費用がかかるとすると、ステークホルダーといわれる人たちの一部は納得しないかもしれない、ではどうするのか、といったことが蓮田市でのARの導入を計画する動機の一つだと思うのですが、そうした計画を契機として、そもそも遺跡公園の景観や、そこに復元住居がある意味を考えたい、ということがありました。高田さんが発表の冒頭で言ったように、史跡公園に指定してもそこになにもなかったら、いわゆるシンボルとして機能しないのでは、という話がありました。そこに建っているモノの「真正性」は議論があり、今も続いていますが、結果として建ったモノは、そこにいろんな人たちを巻き込んでいることも含めて、シンボルとして機能するのではないかということを今の高田さんの話を聞いていて思いました。今日の会のタイトルは住居復元と「史跡公園」としていますので、御所野では建てた住居を使って、公園でどういった活動をして地域住民を巻き込んでいったのか、その活動内容を高田さんに補足的に紹介してもらいたいのですが。

高田　うちのボランティアの団体は、三つあります。ひとつは、遺跡に来た人に説明をするガイドを中心にやる団体。それからもうひとつは、自分たち自身が遺跡に行って楽しむというか、あるいは他の周辺のどっか遺跡にも行って楽しむ会。しかもそれはその遺跡だけじゃなくって、自然とかそういうのも含めた幅広い分野を対象にする

自然と歴史の会という団体です。もうひとつは、一戸町で長い間発掘調査に作業員として参加した人たちで作った「発掘友の会」という会です。そのひとたちも公園の清掃をします。その発掘友の会というのは、もともとは地元のおばさん、今はもうおばあさんになっていて、つまりおばあさんおじいさんになっている人たちですが、実はそういう人たちの情報というのは、すごくたくさんあります。つい最近まで伝統的な生活をしてきている、縄文時代の生活とまではいえないけれど、かなりずっと連綿と続いてきた、その地域の文化というのを自分たちが経験してきているので、そういう人たちが関わる利点というのもたくさんあります。竪穴の復元などにも生かせることもたくさんあります。それから、そうやって遺跡と関わると、遺跡に愛着を持つようになるからしょっちゅう遺跡に来ます。自分たちで一緒になって遺跡を守っていこうという意識が強くなります。そういう意味でも、復元そのものもきちっと復元する事も大事でこだわるべきだが、それとともに地域の人を巻き込むというのも非常に大事だと私は思っています。遺跡を理解してもらうために・・・。

そのほか御所野では地元の小学校で愛護少年団を作って活動しています。全校生徒100人ぐらいの小さな学校ですが、そのうち3年生以上の70人ぐらいが加入しています。遺跡がオープンしてからずっと活動をしています。自分たちで掃除したりあるいは勉強会をしたり木を植えたりしています。そのなかですごいのは、修学旅行に行きますよね、六年生になると。以前は仙台に行っていました、ここ北陸の金沢と同じで、東北では仙台がいちばん大きい都市ですから。その修学旅行先の仙台駅前で御所野遺跡のPRをしてくるのです。出発前に博物館にきて道行く人に差し上げるグッズを自分たちでつくり、それを仙台駅で配っています。そうすると、小さいお子さんからもらったからということで、わざわざ御所野遺跡を訪れてくれる人も結構います。この間は仙台が被災したこともあり函館に行きました。

いかに地域を巻き込むかということが、遺跡が生かせるかどうかのポイントだと思います。そのための一つとして、こういう竪穴の復元も、もちろん精度にこだわるけれど、いろんな人たちに関わってやってもらうということも、ひとつの目的になるだろうと考えています。それから、復元ということに意味があるのではないかと思うのは、茅葺きだろうと土葺きだろうといいのですが、そういう縄文時代の景観作りの中で建物を復元するということが大事ではないかと思っています。いくつかの復元建物があったら、そのまわりにクリ林があるとか、自然がいっぱいあるとか、そういうトータルな景観を作るための一つの要素としての建物復元を考えれば、非常に意味ある事だと思います。さっきから茅葺きではなかったとか、すごくこだわっているように見えたかもしれませんが、私はそちらの方が大事だと思っています。茅葺きでもいいんです、もちろん私は縄文時代には茅葺きはないと思っていますが。茅葺きか土屋根か、という議論とは別に、景観をふくめて地域の人たちと一緒に建物を作り上げるということが非常に大事ではないかと考えています。

それはヨーロッパの人たちに説明するためにも一番必要だと思います。ヨーロッパ

では建物があったら、それが壊れていてもなんでも、本物であれば真正性だ、そうでなければ駄目だという発想ですが、そうではなくて日本の場合は土の中にしかないから、逆に言えばそういった事も可能という、これもまたひとつの方法だということを海外の方々にきちんと理解してもらう必要があると思います。

鏡味　治也（当時・国際文化資源学研究センター長）もうそろそろ終わりの時間ですし、どうしてこのようなセミナーを開くことになったのか、今回遠くから来ていただいた方たちに、次回以降もぜひ来ていただきたいと思いまして、少し喋らせていただきます。

文化資源学というのは、特に考古学の話をすると、やはり出てきたモノ、残ったモノをどうやって使うか、観光利用、地域活性化と簡単に結びつけられがちなことを懸念しています。私たちが考えている文化資源というのは、モノというよりむしろそれを生み出して使ってきた知恵の方が、残された者に取ってより価値のあるものだと思います。モノそのものを現在において利用するというのは、ちょっと違うと考えています。今日の高田さんの話の中でも、屋根に土をのせることで、燃えにくい、火災を防ぐという話があった。もしかしたら防火の意味で、それこそがまさに縄文人の知恵だったのかもしれない。単純に木や茅で作らないで、あえて土にするという、そういうことを伺わせてくれるような展示をしてあると、映像でもなんでもいいと思いました。

もう一つは、復元というのは目的ではなく、復元をすることで発見していくプロセスであるというのが大事なことだと思いました。私は金沢大学に来る前は愛知県のリトルワールドという、世界各地の民家を復元・移築して展示している博物館に 5 年ほど勤めていました。そこでも問題になったのは復元です。どうやってなにを復元して、なにが本物に一番近いかということ、オーセンティシティ、つまり真正性が問題になりました。私の専門はインドネシアで、バリ島の大工に向こうの木を刻ませて日本まで持ってきて、大工も連れてきて日本で組み立てたりもしましたが、どれだけやっても「本物」にはならない。日本で建てる限り、復元です。ただ、彼らが建物をつくるプロセスの中で、彼らにとって家という物がどういうものなのか、どういう風に作っているのかを知ることができました。高田さんのお話と似たような経験もありますので、印象に残りました。

そういう訳で、文化資源学センター全体の活動の中でのセミナーの位置づけというのは、例えば考古学だったらモノを使ってどうしようという話になりますが、その裏にある人間がそういう物を作り出してきたということを、いかにそこに分け入って調べて、広める事が大事ですし、子どもたち、住民、役所もユネスコも全部巻き込んでやること自体に意味があるという、そこに重きを置いたものになるのかな、と思いました。

吉田　もともと御所野の本格的な調査は工業団地の造成計画からはじまった**緊急発掘**だったということですが、私も大規模工事に伴う事前調査にいくつか参加した経験があります。そうした調査では、その地方に住んでいる方を作業員として雇用します。そうした方達との関係は、調査が終わった後は切れてしまうことが多いのですが、今日の高田さんの話を聞くと、そこでできた関係をお互いに生かし、途切れさせずにやって来た結果、さまざまな取り組みができたというのが印象的でした。日本で独自に発達してきた「行政発掘」は色々問題点も指摘されていますが、それに参加している、あるいは参加した人はたくさんいるというのは確かな財産で、いくらでも生かしようがあるのではないかと、個人的には感じた次第です。では今日は高田さんは岩手県から来てくださいましたので、最後に拍手で終えたいと思います。

緊急発掘　大規模土木工事、土地改良事業などに際して、考古学遺跡を記録保存するために行う発掘調査のこと。工事の前に行われることから「事前発掘」と呼ばれることもある。日本では主に地方自治体の教育委員会、もしくはそれらの外郭団体である埋蔵文化財センターが行うことから「行政発掘」と称されることも多い。学術的関心から必要があれば行う「学術発掘」はこれらの語と対比して用いられる。発掘調査はすべからく学術的であるべきとの考えから、こうした区分自体に批判的な声もある。英語圏では同様の調査は Salvage Archaeology、または Rescue Archaeology と呼ばれる。韓国では同種の発掘調査は「救済発掘」と呼ばれ、フランスでは archéologie preventive と称される。